

でも一週間たっていたいんしてきた浩樹は、まあまあま
 しいな赤ちゃんになっていた。ほわほわのかみの毛で、ちっ
 ちな手と足はピンク色。顔もちょっとはかわいい。

よかったーとよろこんだのは、ほんのすこしのあいだだ
 け。だって浩樹はものすごくなきむしだったんだもん。
 「麻美はこんなじゃなかったけどなあ。あんたっていい子
 だったのね」

ママもなきそうな顔で、あたしをちらっと見る。
 そうよ、あたしはいい子。いまごろわかったの？ □を
 とんがらしてむねをそらしてみた。

でも、そんなこといばってる場合じゃなかった。だって
 浩樹ってば、おっぱいのんでないて、おむつとりかえてない
 て、(ちょっとねて)おふろに入っていないて、おきがえしてな
 いて、(ちょっとねて)……。ずーっとそのくりかえしだもん。
 おとまりしていたおばあちゃんが自分のうちへ帰ると、
 ママはもっとおろおろした。

「おっぱいが足りないわけじゃないわよね。おむつもと
 かねたばかりだし。ぐあいがわるいのかしら……」

おいしゃさんにつれていっても、
 「どこもわるくはありません。こういうカンの強い赤ち
 ゃんはいるもんです」

と言われたんだって。カンが強いってどういうこと？
 「わたしにもわからないわよ」

とママはまたなき出しそう。

しょうがないから、ママは浩樹をだっこして歌をうたう。
 なぜか歌を聞いているときはごきげんだから。ようちえん
 に行っていないときは、あたしもうたわされる。パパもうたっ
 てみたけど、なきやむどころかもっとないた。歌をきんされた
 パパは、さみしいような、ほっとしたような顔をした。

「あたし、このごろほったらかしにされてると思う」
 ある日、ぶうっとふくれてそう言った。ママは浩樹をゆ
 すりながら、こまったようにまゆげをよせる。

『モ〜モタロさん』、そうね、ちっとも麻美をかまっ
 てやれないわねえ。『モモタロさん』

「ねるまえの絵本も、ちっとも読んでくれないし」
 『おっこしにつけた〜』、ほんとだわ、それどころじゃな
 くて……。『きびだんご〜』

「読み聞かせは、本ずきで頭のいい子にそだてるためなん
 でしょ？ あたしの頭、わるくなってもいいの?！」

『ひっとつーわたしに』、パパに読んでもらうのはどう？
 早く帰ってきたときに……。『くださいな〜』

「パパはだめ。大きなガラガラドンのところを、子ヤギの
 声で読んだりするもん！」

ママはかなしそうな顔をして、モモタロウの二番を歌い
 はじめた。まったくもう！